

1-1					
主題	誤嚥性肺炎ゼロに向けた口腔ケアの取組みと利用率向上の効果				
副題	介護報酬の引き下げに対して、現場の介護職員が出来る事				
キーワード 1	口腔ケア	キーワード 2	利用率	研究(実践)期間	3ヶ月

法人名・事業所名	社福)一誠会 特別養護老人ホーム 偕楽園ホーム
発表者(職種)	糠信幸輝(介護職員)
共同研究(実践)者	田中健太郎(介護課長)、池野夏樹(介護職員)

電 話	080-691-2830	FAX	042-691-8288
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	偕楽園ホームは東京都八王子市の北西部に位置し、今年で開設 37 年を迎えた従来型の特別養護老人ホームで、平成 26 年に ISO9001 の認証を取得しています。ご利用者 100 名に対して常勤職員 30 名、非常勤職員 13 名(うち介護福祉士資格保持者 25 名)で、職員 1 人あたりのご利用者の配置は 2.3:1 となっています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

介護三大業務は排泄、食事、入浴と言われており、それと比べると口腔ケアは影が薄い印象があるのは否めない。実際当施設でも口腔ケアの重要性は理解されているものの意識が低い。原因としては利用者によっては拒否が強い事や開口が困難な場合があり、職員が口腔ケアに対して苦手意識を持ってしまう可能性があると考えられる。こういった状況は必然的に利用者の口腔内の衛生状態の悪化を招き、その結果平成 27 年度の 46 名の入院者のうち 9 名の利用者が誤嚥性肺炎により入院となった。入院が増えると利用率が減少し、当然施設介護料収入にも影響が出る。当施設の平成 27 年度の利用率は、98.76%で平成 26 年度の 97.19%を超えたものの、施設介護料収入は介護報酬の単価の引き下げもあり、340,986,756 円から 33,293,353 円と 8,049,403 円の減収であった。

こういった現状を受け止め、介護職員の口腔ケアに対する意識改革、現場の介護職員の統一を図り誤嚥性肺炎による入院者を減らすことが課題として挙げられた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

研究目的

- ・職員の口腔ケアに対する意識を高め、誤嚥性肺炎による入院者を減らす。
- ・現場の介護職員の経営意識を高めることによって、利用率を向上させ収入増を図る。

目的に対する仮説

- ・訪問歯科指導の下、当施設で行っていない新たな取り組みを行う事で、職員の利用者一人一人に対して口腔ケアへの意識が高まる。
- ・他職種と連携し、口腔ケアに取り組むことで誤嚥性肺炎による入院者が減り、利用率が向上する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・口腔内の衛生評価を訪問歯科による ABCD 評価で評価を行い、評価が低い（CD 評価）利用者を周知する。（A：きれい Bややきれい C少し汚い D汚い）
- ・自身で口腔ケアをされる利用者の意識を高める為、味付きの歯磨き粉などの工夫を行う。
- ・殺菌作用があるというカテキンが入った緑茶でのうがいを勧める。
- ・口腔ケア委員会に看護師加入する。（看護師の目線から口腔ケアに対しての意見をもらうため）
- ・介護口腔ケア推進士資格取得者を増やす。
- ・経営状況の報告。

《4. 取り組みの結果》

- ・ABCD 評価（CD 評価の方のみ抽出）

利用者 100 名に対して ABCD 評価開始月、28 名

取り組み開始 1 ヶ月目、29 名 2 ヶ月目、23 名 3 ヶ月目、18 名

- ・誤嚥性肺炎による入院件数及び日数

平成 27 年度 9 件、81 日（全体 46 件、1108 日間） 28 年度 0 件、0 日（25 件、724 日間）

- ・利用率

平成 27 年度 98.63% 28 年度 99.69% （参考 26 年度 97.17%）

- ・施設介護料収入

平成 28 年度 338,489,974 円 前年度+5,552,621 円

- ・介護口腔ケア推進士

平成 27 年度 5 人 平成 28 年度 2 人（全体の常勤職員の 23%）

《5. 考察、まとめ》

訪問歯科による ABCD 評価の結果から、職員の口腔ケアに対する意識は高まったといえるのではない。意識が高まった事で誤嚥性肺炎による入院者数を減らすことができ、利用率の向上にもつながったと考えられる。利用率が向上した事により、平成 28 年度サービス活動増減差額についても 45,504,006 円で平成 27 年度の 32,218,354 円を 13,285,652 円上回った。また口腔内の衛生状態が良くなったという事は、食事を今まで以上に美味しく召し上がれていると思われ、QOL の向上にもつながっていると考えられる。本研究でただ口腔ケアを行うのではなく、創意工夫し口腔ケアを行っていくことで、利用者にも職員にもさらには施設にも、良い影響や変化をもたらす事がわかった。今後も継続していくことで、さらなる口腔ケアの質の向上につなげたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

老年歯学 第 16 巻 第 1 号 2001 口腔ケアと誤嚥性肺炎予防 米山 武義 他著

《8. 提案と発信》

上記の取り組みを継続していくことは職員の意識改革、口腔ケアから介護サービスの質の向上はもちろん、現場職員の経営意識は大切であり、利用率の向上による施設の収入など以外にも、さまざまな可能性が広がっていくのではないかと。今後も口腔ケアの重要性を発信し続けていき、利用者がいつまでも食事を美味しく召し上がり続けられる様援助していきたい。